

Title	「上級日本語」の構想とその一考察
Author(s)	莊司, 育子
Citation	大阪外国語大学留学生日本語教育センター授業研究. 2005, 3, p. 17-32
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10453
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「上級日本語」の構想とその一考察

莊司 育子

【要旨】

いわゆる文型積み上げ方式で初級・中級日本語を習得した後に進む、上級日本語とはどのような内容であるべきかを検討した結果、初級・中級が限りなく文の構造上の形式と意味に視点を置いた文型であるのに対し、上級で提示されるべき範疇は、いわゆる辞書記述における形式と意味を超えた多様な言語表現であるとした。それらを具体的な形で示し、作成したテキスト『上級日本語』において挙げた10の課立てからなる項目についてそれぞれ意図したねらいを明らかにした。

また、『上級日本語』において設定された項目が、実生活における言語表現にどのような形で用いられているのかを検証すべく、2001年から2004年にかけて新聞を用いて行った上級レベルの文法授業において、実際に授業で取り上げた用例を挙げながら内容を検討し、上級およびそれ以降における日本語学習の指針を示した。

1. はじめに

大阪外国語大学では留学生日本語教育センター（CJL）において国費学部留学生の予備教育（Uプログラム）を行っている。ここで留学生は、仮名の習得から学部の専門教育に堪えうる日本語までをわずか一年で身につけなければならない。10年以上にわたってこのプログラムの教育事情に関わり、語学教育の現場を見てきた一教員として、率直なところを言えば、これは文字どおり「不可能を可能とさせる」プログラム以外の何者でもないと思う。私などは出自も体系も異なる例えばアラビア文字を一から学び、教養や各種学問知識をアラビア語で理解し記述し、大学入学試験に通るレベルにまでたった一年で到達するなど（いくら年齢を遡れたとしても）あり得ないと思っている。しかし予測とは裏腹に、これまでにここを巣立って行った延べ700人余りの留学生らは、私に言わせればこのような「離れ業」を当たり前のようにやっけているのである。さらには、進学先の大学で優秀な成績を修めるのみならず、大学院にまで進学し大成したという事例も決して少なくない。彼らはひょっとして「語学の天才」なのだろうか。負け惜しみではないが、私にはどうしてもそうとは思えない。学生自身による努力はもちろんであるが、何よりもそれを支える他に類を見ない学際的な教育体制、支援体制がCJLにはあるからだと思っている。

本稿では、CJLにおいて行われているUプログラムの日本語教育について、特に上級文法と呼ばれる領域の内容を検討し、試みとして行った実践とその検証を報告するものである。まずはじめに、「初級・中級」に対する「上級」の範疇を規定し、そして「上級」に課せられている教育内容についての枠組みを、一つの試行例として提示する。そして、その具体的項目を著したもの、大阪外国語大学留学生日本語教育センター日本語教材叢書No.27『上級日本語』第二版（2001年）について、その構成内容の意図とねらいを述べる。そして次に、筆者が「上級」の文法と称した内容が、実際にどれほど日常の日本語使用の中で具体的に反映されているのかを検証すべく、2001年から2004年にわたって実際に行った新聞記事を題材に用いた授業につい

て報告し、「上級」の示す枠組みについて検証する。

2. 「上級日本語」の枠組み

2-1. 「初級・中級」文法とは

Uプログラムのような例が典型であるが、非常に短い限られた時間内にできるだけ多くの表現を効率よく導入するとなれば、いわゆる文型積み上げ式の構造シラバスに基づいて組み立てられた教科書を用いることとなる。CJLでは、東京外国語大学留学生日本語教育センター編著『初級日本語』『中級日本語』を用い、4月から始めて夏休みをひと月挟み、12月まででこの2冊を終えることになっている。『中級日本語』には本冊とは別に『語彙・文型例文集』が付いており、これは、本冊の読み物で提出されている文型がいくつかの例文とともに列挙してあるものである。CJLでは月曜から金曜まで毎日午前2コマ（1コマ90分）をこのテキストを用いた「文法」の授業に充てている。

文法教育の内容とは何かを考えたとき、初級・中級と、上級とでは、文法教育における文法の範疇は果たして同じものであろうか。

一般に初級では主として「基礎語彙」を中心に据えた「基礎」文型とも言うべき単文を網羅する。中級ともなれば、より単文から複文へ、機能語を中心とした副詞句の伴う、より複雑な文が多く導入されるようになる。では、その先の上級文法ではどのような文型を扱うのかと言えば、中級の文法から上級の文法にかけて、より単語自身のもつ意味が比較的反映されている句から、より単語それぞれの意味からは予測が立たない慣用的な副詞句が、それぞれ一文型として数多く列挙されるのが通例のようである。

しかしながら、統語的な観点から言えば、厳密な意味での文型というのはいわゆる初級の段階で全て導入されているといっても過言ではない。一見、長く複雑に見える文であっても、文の型とは言えば、動詞・形容詞・名詞を述語に据え、それに格助詞の付いた補語で構成された文であるものに限られるのであって、これらのバリエーションはそう多くないと考えられる。

連体修飾をもつ名詞句が補語となると文がより複雑に長く見えるが、要は動詞の項となる名詞句にどれほど修飾語句がつき、必須ではなく任意の項がどれほど付加されていくかによることなのである。述語については、動詞の活用変化の型すべてが、ある典型例の助動詞・助詞（ナイ、マス・テなど）と共に導入され、この動詞の型のバリエーションを知っていれば、その他さまざまな機能をもつ多様な語句に承接できることを知る、というのが、初級で扱われるべき内容ではないだろうか。したがって極めて形式論的な観点から見れば、文の「型」などというのはそう多くはないということなのである。

また、ある文型を「一文型」と認める際の基準は何であろうか。例えば、

私は 留学生です

私は 留学生でした

というテンスのル形、タ形の分化を示すこの二文は一文型なのか二文型なのか。また、

四月から五月にかけて さくらの花が さく

という文が「NからNにかけて」を用いる一文型として『中級日本語』（第4課）では導入され

ている。この文は、「さくらの花が さきます」に「四月から五月にかけて」という副詞句が付いているだけの違いであるのに、別文型として挙げられている。このようなことをしていけば、極論を言えば、「だんだん 花が 咲きます」というように副詞「だんだん」が付いたものも一文型として認めなければならないことになる。

文法構文という観点だけを考えるならば、このようなことは文型数をむやみに増やしているに過ぎず、学習者にしてみれば、いったい文の「型」、つまりパターンはいくつあるのかと途方に暮れることになって、学習意欲を削ぐことにならないだろうか。下手をすれば、単語の数、語句の数だけ文型数が計上されることにもなりかねない。

文法教育とは、本来は、できるだけ簡素化した「型」を最小限に用意し、提示することではないかと思う。表現内容の具体性をもたらす修飾句を挿入するレベルは、本来は「文法」で扱うのではなく、例えば「読解」の科目のように、個別具体的な場や背景のある、文脈が整っているものの中で導入されるのが、本来の姿ではないかと思っている。悪く言えば、「文法」などという時間ほど退屈な、日常の言語使用には全く不向きな教科はない。記号論理学を学んでいるような時間である。

「A=B」を日本語でどう表現するか、それは「「AはBです」というように、「は」という提題の助詞に「デス」という助動詞を付ける」ということが導入されれば、「これは本です」から「私はコーヒーです」のようなウナギ文まで、すべて包括して扱えることになる。もちろん、意味機能として「これは本です」と「私はコーヒーです」を同次元でとらえることには無理があると、多くが考えるであろう。しかし、「これは本です」という文においても、実生活においては、一体この文はいつ、どのような場面で発話するのかということを考えれば、この二つの文はある意味、五十歩百歩とも言えるわけで、その場にある種の背景や文脈の設定が必要であるという点では、実はさほど変わらないのではないだろうか。

しかしながら、言語をただの記号として見た、上記に述べたような極めて構造言語学的な観点は必ずしも語学教育に有効であるとは限らないわけで、そこに、語用論的なものとの折衷が必要となるわけである。

言うまでもないことだが、言葉はあくまで「道具」である。道具そのものの仕組みがわからなければその道具が使えないかと言ったらそうではない。日々使用しているパソコンの仕組みなど、私にはわかるはずもないが、ただ、このボタンをこのときにこのような場でこう押せばいいということさえ知っていれば、知りたい情報を取り出せるし、他者との意志疎通が図れるわけで、十分運用することが可能となっている。

言葉も同じで、「あるまとまりをもった、句点の一つ持つ単体を、できるだけ小さい単位に割った音節のまとまりに分け、そのまとまりを形式で分類し、係り受けといった文法的役割の差異と個々に内包する意味で機能を峻別している」というようなことを知っていることは、言語の運用上必ずしも必要ではない。

「お水を一杯飲みます」が、接頭辞「お」がついた名詞「水」に、数量詞「杯」がついた「一杯」、これが「お水」に係っていて、「お水一杯」が動詞「飲む」の補語となっており、格助詞「ヲ」を取っていることで、「飲む」という動作の対象を表すなどということは知らなくてもいいわけで、また、この文型を導入する際の適切な説明であるとは思えない。語学教育が、いかに早く適切に意志の疎通が図れるようになるかということを目標にする限り、この文は、

水道の蛇口から出た透明の液体をグラスコップに入れたものを口に運ぶ動作、これを発話者がこれから履行することを言明する、このときに、日本語では「お水を一杯飲みます」と言う。このことがわかれば、言語記号の意味機能云々など知らなくてもいい話なのである。

ただ、大学などの高等教育機関で行う言語教育は、非常に限られた時間の中で、如何に効率よくその目標言語の体系を学ぶかであるから、「AならばB」式のモデル、つまり汎用性のある基本原則が提示できれば一番手っ取り早いのであり、それが語学教育における文法、ひいては「文型」だと思われる。そうすると、そのような「文型」は数が多くなってしまえばモデルにはならない。では、一体いくつの、どのような「文型」を提示するのが適切なのだろうか。これは学習者の学習目的、学習時間などによって、それぞれの教育現場によって異なるもので、それぞれに最も適した数と型が提示されなければならないものだと考えられる。

いずれにせよ、「初級・中級」の文法ということで共通するのは、言語を形成する根幹の部分、できるだけ客観的に認知が可能な形式でもって示し、さまざまな場においてもできるだけ応用が可能な型を提出する、ということに焦点があるのである。

2-2. 「上級」文法とは

本来、「文型」と呼ばれるものには数に限りがあり、また、それは、できるだけ簡素化された文の構成上の骨組みの集まりであるということになれば、これを扱うところは「初級」そしてせいぜい「中級」までになるというのは、全くもって当然のことと言える。では、「上級」で扱う「文法」とは如何なる分野となるのであろうか。

「上級文法」とは言うが「上級文型」などという言い方はあまり耳にした覚えがない。繰り返しになるが、構造言語学的にみた日本語の文の構造、句構造は、決して多くはないのである。では「上級文法」で扱われる分野とは、どのようなものなのか。その一例は、さきほどにも触れたウナギ文「私はコーヒーです」であったり、あるいは「男もすなる「大工」というものを女もしてみんとて」（朝日新聞の見出しより）の類となるわけである。

当然、「私はコーヒーです」は先ほども述べたとおり、「NPはNPです」という句構造を持つのであって、「これは本です」と同一である。しかし、「私」「コーヒー」の単語の意味を調べ、 $A=B$ の論理式が「AはBです」という形式で具現されるという変換規則を知っていても、「私はコーヒーです」の表す表現意図は解釈されない。

また「男もすなる・・・」の例は、現代日本語からは大きく逸脱している言語表現であることはひと目でわかる。古典文学を読んでいるならばまだしも、一般大衆紙の、しかも見出しに使われる言語表現であるというのは、一体どういうことなのか。この言語表現を発した人（新聞記事の書き手）は、古典の専門家に向けて書いているわけではない。言うまでもないが、日本語ネイティブなら老若男女、誰もが容易に理解できるであろうことをわかっての表現である。

このような言語使用のあり方を見たとき、いわゆる句構造規則をモデルにした演繹的な方法だけでは言葉の解釈は不可能であることに気づく。言語の運用には、句構造規則だけでは解決できない、何か他の、別の要因が大きく関係していることがわかるのである。個々の単語の意味も習得し、あらゆる句構造規則を知っている日本語学習者にわからなくて、日本語ネイテ

イブにはわかる言語表現、それに絡む要因を示すことが、私は「上級文法」であると考えたわけである。

文法、つまり曲がりなりにも「法則」と言うからには、個々の事例を列挙するだけでは法則にはならない。それらの事例に内包される共通事項を見出して、目に見える形で提示する必要がある。そこで、その共通事項としてどのような項目を挙げるのが適当なのかを検討してみた。そしてその結果、「上級文法」の俎上に載せられるべき項目を10に分類・整理し、一つの試行として『上級日本語』にまとめてみた。

次に、その『上級日本語』で挙げた10の項目について具体的に提示することにする。

2-3. 『上級日本語』の構成と意図

単なる構造言語学的な句構造規則では解釈できない日本語の言語表現の項目、それをさし当たって10の課立てにして集約した『上級日本語』では概ね次のようになっている。どの課も最初に動機付けとなる読み物、エッセイを載せたあと、2~4つに絞った具体的な《学習項目》と、その他、学生の関心度によって好奇心を啓発することをねらった《研究課題》からなっている。

各課立ての表題は、具体的な表現で表したその課で学ぶべき内容を反映し、興味を惹きつけるためにあえてユニークな語句を用いた。ハイフンに続くものがいわゆる文法項目の名称になっている。

(1) ことばの単位一文の構成単位とその種類

統語的に考え得る文型を網羅した初級、中級から、上級への橋渡しとなるものである。学習者がこの段階で既に知るところとなった日本語の体系を国文法的に、またはある方針にもとづいて整理された文法の枠組みを使って、日本語の構造を俯瞰的に見てみようというものである。《学習項目》には、いわゆる学校文法に基づく品詞分類の考え方を紹介した「語の分類」、日本語教育のうえでよく言及されるダイクシスの問題「コソア」、日本語の主語の問題としても議論的となり、未だ使い分けの指南が難しい「は」と「が」、西洋での言語学研究流入の影響で不可避の問題である「自動詞と他動詞」を挙げた。また《研究課題》には日本語の語順に関するものも挙げてある。

(2) 社会と会社 - 語構成 -

一つだと思っている音節のまとまり(単語)を、より分析して考察することによって見えてくるものに気づくこと。前課の(1)を承けて、言葉の仕組み、仕掛けのおもしろさに気づくきっかけの一例が題材となっている。《学習項目》には、統語的な観点で分類できる「複合名詞」、前項と後項で表す意味と機能が異なっている「複合動詞」、単語の前後に共通して付加することができる言語形式を集めたもの「接辞」を挙げた。《研究課題》には、日本語の音節の少なさに起因してよく問題になる同音異義語の例、常用漢字表の本表にも付表にも載っていないが、日本語ネイティブならば一応は躊躇せず読めるであろう漢字で書かれた日本人の名字について提示した。

(3) どのように?どんな感じに? -副詞・擬声語・擬態語-

日本語学習者が書いたり話したりする日本語で、印象としてうまく感じられる人の日本語には一つの傾向がある。それは多様な副詞の類を適切に用いていることである。日本語のレベルが上級であるというのは、すなわち、副詞句を適切に解釈し使いこなせるレベルだと言っても過言ではない。表現の善し悪しは副詞句の存在によって随分と変わることには気づかせる。《学習項目》には、いわゆる副詞とはどのような機能を持ち、どのような特徴があるのかを示す「副詞のはたらき」、そして、実態を音(節)で表現することから学習者が日本語を学び始めてからわりと早くに興味を示す分野であり、また日常の言語生活にも欠かせない「擬声語」「擬態語」について挙げた。《研究課題》には擬声語、擬態語のもつ形態的な特徴を話題した。

(4) 油を売る -慣用句・ことわざ-

比喩的あるいは引用的に用いて、表現をより具体的に内容豊かにする技法の一つが、文中に慣用句・ことわざを挟むことである。句・文全体が一つのまとまりとなって意味をなしているため、当然、単語レベルに分解しても解釈はできない。また、こういった慣用句・ことわざは、決して「読む」「書く」場面にもみ使用されるのではなく、日常の生活にも密着した「聞く」「話す」場面にも多分に用いられるので、日本語学習者の頭を悩ませる問題の一つである。

もちろん、慣用句・ことわざの数は膨大であり、知っていればいるほどそれに越したことはないのだが、《学習項目》には、自ら話したり書いたりできる使用語彙のレベルにあることが望ましいものを「慣用句・ことわざ(必修編)」、聞いたり読んだりしたときに文脈からおおよそ推測できるぐらいの理解語彙のレベルの「慣用句・ことわざ(発展編)」として分けて提示し、学習者の負担に配慮した。また、その言葉の由来までもがよく知られている「故事成語」も挙げた。《研究課題》には、ひとつのフレーズの単位ということで、川柳を話題にしてみた。

(5) 「モモタロウ」の解釈 -身体の部分が入った慣用句-

前課の(4)に続くもの。一口に慣用句と言ってもさまざまな観点から種類分けができるが、身体の部分を用いた表現は非常に多く、ごく日常的に使われることから重要性は高いと判断し、これだけを取り立てて一つの項目に仕立てた。《学習項目》には「「頭」に関する慣用句」「「体」に関する慣用句」の二つにまとめて整理して挙げた。

慣用句の中で用いられている一つ一つの単語自体は既習であり易しいものが比較的多い。一見、推測で意味がわかりそうなものがあったり、あるいは他言語で同じ言い方があっても日本語の場合とでは意味が異なるものもあって、学習者が比較的抵抗なく興味をもって学習に取り組めるものである。

また、身体の部分が入った慣用句がエッセイの中に出てくるといっただけで、直接的には関係ないが、表題にある「モモタロウ」は、言語がいかにその文化・社会・歴史を反映したうえで形成されているかを示す例として挙げた。ある人から「アンタは舌切り雀のばあさんのようだ」と言われたら、どう反応するべきか、日本語を母国語とする者なら言わずと知れている。しかし、この文の解釈が正しくされるには、分節を行い単語の意味を調べるだけで事足りるだろうか。日本語を母国語とする者にはわかって、日本語の辞書を一冊全部覚えて知っている学習者

にはわからない日本語の一例である。このような領域にまで踏み込んで言葉のあり方について考えを巡らすと、一体「言葉を教える」とは何を教えることなのだろうかと、途方に暮れたりもするのである。

しかしそこは気を取り直して、《研究課題》にはモモタロウに因んで、日本の昔話を話題にしてみた。

(6) 「先生が笑ってはった」 - 方言 -

一般に初級・中級で提出される文型、語彙はいわゆる標準語となっている。書かれたテキストの範囲内では特に目立たないが、日本で生活している以上、特に口頭表現で実際に耳にする音や語形、語彙にはさまざまなバリエーションがあることに、学生たちは早くから気づいている。ネイティブのように話すことを目指す学習者は、方言に関しても、これは「書き言葉」ではなく「話し言葉」のレベルとして認識する傾向もある。

この課では、実は日本語という言語は単一ではなく、方言というバリエーションがあり、その方言にも独特な動詞の活用や決まった終助詞の使い方など、ある種の文法規則があることを知り、日本語の多様性に気づかせることを目的とした。

《学習項目》には、大阪外国語大学で勉強している学生にはとても身近な関西弁を題材に選び、「大阪弁の語句」「大阪弁の「文法」」「大阪弁のアクセント」を挙げた。また、「研究課題」では、その他の方言について示唆するものを掲げた。

(7) 日本語の小説は経済的? - 文体からわかるもの -

いわゆる普通体とデス・マス体といった文体は早くから導入されるが、それ以外にも特に口頭表現において、その言葉遣いから、話し手の特徴（性別、年齢など）がわかったり、また、話し手と聞き手の両者の発話が絡む場合は、その社会的人間関係までわかってしまうことがある。その原因は、特有の終助詞だったり、既に初級で学んでいる敬語などが代表的な例であるが、広い意味での待遇表現、つまり日本語は敬語に限らず、いかに話し手は聞き手を意識して言葉を選択するのかについての一例を示し、また「言葉から受ける印象」とは具体的にどのような言葉の形式から、どんな効果が得られることなのかについて考えさせることを目的とした。

《学習項目》には、「かたい文・やわらかい文」として、具体的にどのような言語形式が「かたい」あるいは「やわらかい」と感じさせるのかを扱ったもの、「男言葉・女言葉」として、実際にそれぞれ男女がそのように発話するかのかどうかは別にして、慣習として「男」あるいは「女」が用いる表現として形式化されているもの、「聞き手への配慮」として、敬語、呼称の問題を扱った。また、《研究課題》には表記の問題を取り上げ、正書法の範囲外の問題として、どのような場合に、ひらがな、カタカナ、漢字を用いるか、またその表現効果についての問題を取り上げた。

(8) パロディー世相 - 四字熟語 -

文章を作成する際に、できるだけ和語よりも漢語、しかも四字熟語を用いて、幾分か格調の高さを醸し出すことがある。このような漢語優位の意識は現代においても変わらず、特に四字熟語は「読む」「書く」の場面ではもちろんのこと、四字ということで音節数が多くなり同音異

義の混同を避けられることもあって、「話す」「聞く」場面でも頻繁に顔を出す。よって特に日常遣いの四字熟語について、慣用句・ことわざと同様に、《学習項目》では、使用語彙レベルのものを「四字熟語（必修編）」、理解語彙レベルのものを「四字熟語（発展編）」として挙げた。また、(8)の導入の読み物には、たまたま既成の四字熟語をもじって世相をパロディに仕立てているものを話題にしたので、《研究課題》ではその元の四字熟語を探すことを課題にした。

(9) 「男もすなる「犬工」というものを・・・？」 - 日本の古典 -

ふつう外国語として日本語を初めて学ぶ場合、その対象となる日本語の体系は現代日本語のものである。日本語の歴史を何百年単位かに区切って比較してみたとき、そこには目に見えて明らかに文法や語彙に変化が起こっているのであるが、その変化の瞬間というのはなかなか捉えることはできない。九つあった動詞の活用の種類が、いつから五つに減ったのか、「この動詞については昨日から一斉になくなった」などと言う日があったわけではないだろう。言葉は連続と途切れることなく、人から人へ受け継がれて行っていることは紛れもない事実である。

したがって、古典語とはいえ、それは現代語から全く切り離すことはできないのであって、実際、日常の言語表現においても見え隠れしながら細々と生き延びている古典語の類があるのである。「現代日本語」つまり「現代において用いられている日本語」を学ぶのが学習者の目的であるならば、古典語も十分この射程内に含まれると思われる。

そこで《学習項目》には「古典的表現」として若干の古典文法およびそれを反映した表現と語彙を、そして「有名な古典文学」として、代表的な古典文学作品と作者、およびその作品の冒頭部分を紹介した。なお、この課のタイトルにある「男もすなる・・・」は、導入の部分に用いた新聞の見出しからのものである。ある種の古典は、新聞の見出しに用いられるほどの「日本語の常識」になっているというところが、学習者に知ってもらいたい点である。また《研究課題》には小倉百人一首を取り上げた。

(10) 情報を読みとる - 新聞記事から -

さまざまなテキスト・書かれた物がたくさんある中で、特に新聞に見える日本語の最も大きな特徴は、限られた小さな紙面に大変効率よく情報が盛り込まれているという点である。その顕著な例が見出しであるが、そこには日本語の持つ表記、音、語の用法といった特徴が余すところなく利用されている。最小限の言葉で最大限の情報を伝える日本語、それが新聞における日本語の特徴であるので、単語一つの解釈にも深い造詣が必要となってくる。

したがって、これまで上記の(1)から(9)で見たことの集大成が、最後の締めくくりに新聞記事の読解において経験されることとなる。

《学習項目》には、「新聞の見出し」として、新聞における見出し特有の文法的な特徴を紹介し、「新聞記事」で具体的に記事を読みながら、そこに多用される表現形式などを学ぶ。そして、見出しであるからこそ、よくそこで用いられる「ダジャレ」についても考察し、言葉遊びの楽しさを知ることが目的にした。一言で、上級レベルとはどのようなレベルかと問われれば、それは、ダジャレ、言葉の引っかけなどが、それがそれであるとすぐにわかり、それに反応できることだと思うのだが、どうであろうか。

また、《研究課題》では、新聞の求人広告を題材にし、漢字あるいは漢字を含む表現の中に

は、「読む」ためにではなく「見る」ために書かれているもの、つまり、声に出して読むことを想定していないような、一種の記号のような使い方をすることが多くあることを知り、あらためて日本語の表記のおもしろさを認識させることを目的とした。

その他、『上級日本語』全てにわたって一貫して心がけたことは、必ず原文のままのテキスト（読み物、エッセイ）を導入部分に用いたことである。これまでの初級・中級レベルで学習者が目にしてきたものは、教材用にルビの付いたもの、難解な部分を易しい語句を用いて書き換えたものである。つまり、日本における実際の言語生活には存在しない日本語、「教材用の日本語」とでも言うべきものしか扱っていないのである。

そこで、上級のレベルになれば、一切手を加えない、つまりネイティブが普通に目にする日本語を、憚ることなく学習者に積極的に見せていこうと考えた。すると、当然ながら、文法的に破格である（ように見える）もの、表記において誤っている（「常用漢字表」や「送りがなの付け方」に照らしてみれば）ものはもちろんのこと、日本語ネイティブにとっては「常識」であることが前提で書かれた、一筋縄では解釈できないものが山のように出てくる。それをヒントに、今後何を学習していけばネイティブのような日本語に近づけるのかを、学習者に考えて欲しいという思いがあった。

特に、「日本語を母語とする者にとっての常識」とは、具体的にどのような知識なのか、また日本語を母語とする者はその知識をいつ、どこで獲得したのかという点を考えれば、それが学習者の日本語習得を阻む大きな障害となっていることは容易に想像できる。

例えば、(5)の「モモタロウ」であるが、これが一体「何」なのかわからない日本語母語話者はいない。取り立ててこのような子供向けの昔話を知っているからといって自慢にもならない類の「知識」ではあろうが、「常識」だから、ことわりもなくいきなり引用されるのであり、またそれが言葉の現状なのである。

(9)の「男もすなる・・・」も、思えば中学生のころ、学校の国語の時間に暗唱させられたものであった。だから、文学者でもないのに、一般人の誰もが土佐日記を知っている。すると「常識」であるから、新聞の見出しにいきなり使用される。言うまでもないが、専門誌ではなく一般紙の見出しに使われるということは、ほとんどすべての読者が容易に理解できると、書き手は想定しているからそうしているのである。しかし、外国人学習者はそのような知識の習得を積んでいないのであり、それで、(5)や(9)のような文章に出会うと当然戸惑うことになるのである。

こういう文章をも解釈できることが日本語の読解力だと言うのであれば、学習者の学ぶ日本語の領域は文法・語彙のレベルを超えたものだと言わざるを得ない。このような趣旨を「上級文法」において学習者に示したかったのである。

3. 実践と検証

次に、「上級」というレベルにおいて対象となる項目を列挙し、それを学んだところで、今度はそこで学んだことが実生活における日本語にどれほど投影されているかを学習者自身に気づか

せ、また今後、日本語の学習意欲を如何により高めるかを課題とした。

そこで、2001年から2004年にかけて、それらを実際に授業の中で実践し、検証を加えてみた。この期間、本センターにおける日本語日本文化研修生（Jプログラムの学生）を中心とした上級レベルの文法（J/R Aの選択SP）を担当し、Jの学生が渡日してすぐの秋学期（10月～3月）に『上級日本語』を使った授業を、そして引き続き春学期（4月～9月）に新聞記事を教材とした上級レベルの文法授業を行うというパターンで四年にわたって実施した。

前半期（秋学期）の授業は毎年20名前後の学生が履修登録し、およそ8割がJプログラムの学生で、その他短期留学生プログラムの学生、大学院在籍の聴講生であった。その国籍も多様である。『上級日本語』の項目どおり順次進めて行き、(1)から(10)の最後まで終えるようにした。テキストの構成に従って、最初に学習目的を示す動機付けの読み物をざっと斜めに読む（一々の語句の解釈はしない。大意のみ読み取らせる）。これは、速読の訓練にもなる。その中で、話題になる部分については丁寧に説明および解釈を入れた。次に学習項目にそって「考察」という形を取ることで、学生自らが問題意識を持って取り組んで行けるようにした。単に型や語句の暗記に終始しないのが「上級文法」であることを何度となく話し、「日本語の辞書項目を全て覚えても、ネイティブのように日本語が操れるのではないとしたら、あなた達（学習者）には何が足りないのか」という点を毎回常にテーマとして掲げた。

後半期（春学期）の授業は、授業当日の新聞記事を教材とした。たまたま確実に手に入るという理由で、朝日新聞の朝刊からだいたい10ほどの記事を切り抜き、一切手を加えないでB4用紙に貼り付けたものを毎回2枚準備した。記事は月に一度の新聞の休刊日を除いて、必ず当日のものをを用いることにした。そうすると、学生は前もって予習をすることはできないのであるが、この授業は「新聞の読み方」に焦点を置いたものではないことと、新聞という、古くなつては価値がないものを扱う以上、一週間前の古い新聞を次週に読むとなれば当然学習者の学習意欲が極めて低くなることを考えてのうえであった。

なぜ上級レベルの項目を検証するのに新聞記事を用いたのか、それにはいくつか理由がある。教材用に加工を加えていない生教材であるという点に加えて、新聞は、専門知識の有無、学識のあるなしを問わず、一般の日本語母語話者であれば、誰でも毎日読んでいるものだからである。特化した知識を持っていなくても読めるはずのもの、とはいえ、扱っている分野は、政治・経済・社会・文化・娯楽等々たいへん幅が広く、生活の身の回りすべての話題が詰まっている。もちろん、読者はこれらに全て通じている必要はないわけで、実際我々は興味にしたがって間引いて読んでいるのが実状であろう。このことも実は非常に重要なポイントである。

身の回りに見えるありとあらゆる日本語を、果たして日本語母語話者は余すところなく読み、本当に正しく理解しているか、またそうする必要があるかという点である。母語話者なら、その「間引き方」を知っている。知っているから、この箇所はおよその類のことだろうと、不明な点を不明なままで負担を感じることなく置いておくことができる。そうして、全体の理解に不都合を感じることなく先を読み進めることができる。

一方、初級・中級で一語一句、正確に漏れることなく意味解釈を行うスタイルで学んできた日本語学習者はそうは行かない。一つでもわからない語が出て来ようものなら、たちまちそこで不安に駆られ、先へ進めなくなるのである。そんなことをしていれば、我々のまわりの言葉はわからないことだらけであり、いつまでたっても言葉の理解の「完成」を見ることはできな

いことになる。

また、新聞は毎日発行されるものであり、紛れもなく現代を映す旬の言葉である。書き言葉であるのに、膨大な言語表現の数々が書かれては消え、書かれては消えている。後年まで繰り返し読まれることを意図して書かれた論文や小説などの書物とは違い、一回限りで読み捨てられるものである。一回限りのはかない言語表現という点では、日々量産されては記録されることなく消えていく、発話における音声表現と似た性質を持っていると言えよう。

この授業の進め方としては、まずその日の教材となる当日の新聞記事をピックアップしたB4二枚のプリントが配布される。まずは見出しについて音読させ、見出しだけからわかる情報を取り出す、ということを学生に一人ずつ指名してさせた。その取り出し方とは、見出しに書かれている表現を文レベル（いつ、誰が、どこで、どうした、というような述語文）で平易な日本語を用いて言い換えさせるというものである。いきなり渡された新聞記事を目の前に、その場で持てる限りの日本語の知識を総動員して、推測と半ば勘のようなもので答えるしかない学生達は、いつ指名されるかわからない緊張感と、読めない漢字、知らない語句を必至に電子辞書で調べながら、集中して懸命に取り組む姿勢が終始見られた。

見出しの表現の分節、てにをはなど新聞特有の規則や特徴は、最初にひととおりまとめて導入してある。内容の意味が多少不明瞭でも、だいたいはこの法則に則って一応の文レベルには言い換えることができる。特に難しいのは、見出しで多用される略語（組織名、会社名など）で、これは記事の解説の初めの部分にちょっと目をやれば完璧に復元できる。こういった要領も知らなければならぬ。授業では記事の解説部分の読解は、あえて見出しに関係のある必要などところだけ拾って行った。これを繰り返して行っているうちに、興味のある記事はもちろん全部目を通せばいいのだが、とりあえず、解説内容を読まなくても、見出しだけでも随分多くのことが把握できるのであり、如何に「知らなくてもいい」部分が多くあるかがわかってくる。だいたいここまでわかれば、あとは読まなくてもいい、ということを実際に生教材で何度もやることで、学習者は自らの語学力への不安を、自信に変えることができるのである。

授業の回を経るにしたがって、授業の初めに見られた学生の焦り（急いで電子辞書を引く姿）が次第になくなっていくのがわかった。一般に漢字の読みについては、学習者にとってはいつまでたっても頭を悩ませる事柄だが、ある時点で、「読めなくてもいい・知らなくてもいい」語彙があることに気づくのである。「読めなくてもいい・知らなくてもいい」とは多少語弊もあるが、つまり、辞書には存在しない漢語の略語、ある年代に日本で話題になった物や現象、何かをもじった掛詞、ダジャレなどである。これは、純粹に日本語という言語体系しか知らない学習者には太刀打ちできない言葉の分野である。学習者はまさにここで、今まで取り組んできた言語習得の方法に対して、ある種の限界を身を以て知ることになるのである。

さて、このように、学習者にある種の「自信」とある種の「絶望感」を感じさせるような過程を繰り返しながら、後半期の授業は進められて行ったわけであるが、実際、毎週授業のある一曜日（2001～2003年度は月曜日、2004年度は金曜日）に限定し、しかも確実に手に入る新聞一社（朝日新聞）に限ってみて、どれほど『上級日本語』の項目に合致するようなものが題材として拾うことができたか、以下にその教材となった記事の見出し例を『上級日本語』の課立てごとにまとめて挙げてみた。

(1) 及び(2)に関連

印パ情勢米口仲介 副長官派遣・首脳会談も	2002年5月27日(月)
男女3人ネット自殺か	2003年5月26日(月)
関電社員、客情報漏らす 使用量など183件 取引業者に5人関与 処分検討	2004年5月7日(金)
エベレスト ツアー登山邦人死亡 広島の女性 登頂後に遭難	2004年5月21日(金)
曾我さん家族 きょう再会へ	2004年7月9日(金)
糞・屍・呪・癌・姦・・・に批判 人名用漢字案 数十削減へ	2004年7月9日(金)

ここで話題にしたことは、新聞に頻用される特殊な助詞の使い方(「か」「も」「へ」)、過去時制がル形であること、格助詞の「ガ」「ヲ」が特に省かれていること、漢語を多用し補助動詞(「する」「なる」)が隠れていることなど、いわゆる新聞の見出し特有の文法規則に着目したものである。特に初期の段階では、不完全な見出し表現をあえて別の平易な表現、「いつ、誰が、どこで、何を、どうした」というような述語文に言い換えさせることに重点を置いていた。

(3)に関連

「おやじパワー」でノリノリ 父の日で阪神百貨店 5バンドが競演	2001年6月18日(月)
すっぱりパラソルが人気 紫外線対策も進化、色も多彩に	2002年4月22日(月)
与野党対決くっきり 党首・幹部ら続々 衆院和歌山2区補選	2002年4月22日(月)
現代のルパン?盗品美術館 仏の男、自宅に12億円分・・・母知らず刻んでポイ	2002年5月20日(月)
ベルギー闘志フツフツ 「強い相手にこそ本領」	2002年6月17日(月)
本国も自信ムクムク 強豪消え「我々が世界一」	2002年6月17日(月)
「5増5減」2与党・民主は賛成方向 肝心の自民、ぐらぐら 衆院小選挙区 議員説得進まず	2002年7月1日(月)
「戦地」イラク派兵国ビリピリ	2003年7月7日(月)
ベッカムまた稼ぎ頭 CM出てがっばり、約30億円	2004年5月7日(金)
お日様 ぎっしり	2004年7月9日(金)

擬声語・擬態語を含む副詞の類は、母国語に翻訳しても目安にしかならず、それが表す背景、文脈、実態そのものを指し示すこと抜きでは、なかなか意味内容を伝えることは難しいため、日頃の学習環境ではなかなかうまく導入できないものである。しかし、新聞に見える副詞の類は、リアルタイムで起こっている実際の出来事を描写しているため、学習者が関心を持っている、あるいは同定できる事柄であれば、具体的なイメージを抱かせることができ、比較的容易に言葉の持つ表現内容を伝えられることとなった。

(4)に関連

「情けは人のためならず」って? 国語の世論調査で48%誤用	2001年6月18日(月)
-------------------------------	---------------

部分的反論お断り 「全体計画示せ」竹中氏、族議員にクギ 2001年6月25日(月)
 脱ダム 地方に一石 中止表明 首長ら国に「推進を」 2002年7月14日(月)
 終わらぬチケット狂騒曲 複雑な販売方法アダ 海外ではだぶつき 当日券に希望も
 2002年6月3日(月)
 伝統転じベンチャーとなす 2003年7月7日(月)
 「有終のVを」大阪マルビル 虎色に染まれ 電光板、9月末撤退 感謝の応援 放映中
 2003年7月28日(月)

「有終の美を飾る」という慣用句を知っていなければ、「有終のV」と言われてもさっぱり何のことだかわからないことになる。近年はダジャレとも言うべき見出しが多くなり、学習者にはさらなる高度な言葉の知識が要求されるようになったことを思わせた。

(5) に関連

枚方・4人焼死 深夜の煙 叫ぶ隣人 救いの手も届かず 2001年6月18日(月)
 さよなら花子さん 学校トイレ“快革”中 ベンチ・音消し・洗浄便座・・・子らの声採用 教育効果も
 2002年5月13日(月)

「花子さん」は一体何なのか、本国でかなりの日本語を勉強してきた学習者でもわからない。「モモタロウ」同様、言葉を習得することの奥深さを思い知らされた例である。

(6) に関連

ポイント制VS「勉強しませ」 激突東西値引き道 東京の激安店大阪へ 意地の両刀遣いも
 2001年5月14日(月)
 阪神、34試合目の落城 首位は預けたるわ ファン、表情明るく 2002年5月13日(月)
 「読めレル」は岡山出身?! 「着リ!」は九州の炭鉱から?! ルーツ方言 若者言葉
 2002年7月8日(月)
 金魚すくい、ズルはあきまへん ポイに連盟刻印 大和郡山 2004年4月23日(金)

地方版には時折、それぞれ地元に着した方言が親しみと興味を惹く目的でよく用いられるようである。大阪外大で学ぶ学習者の生活圏は大阪であるため、日常生活に欠かせない大阪弁は常に大きな関心の的であった。

(7) に関連

思い出も人も ぎゅーっと GW Uターン 2001年5月6日(日)
 縁側から「おじゃましてーず」座敷にクマ リンゴ失敬 岩手 20個ペロリ 姿消す
 2001年5月14日(月)

実生活に見られる表記の問題である。ひらがなで長音を「ー」と記すことは「現代仮名遣い」には記されていない。厳しい校正チェックがかかっているであろう記事の記述に、このような

表記を見つけると正直戸惑ってしまう。一昔前と比べて「やわらかい」見出しがますます増えたように思われた。

(8) に関連

二つの修士号取得、3年でOK 工と経営 一挙両学 阪大が新制度 「新産業の担い手を」

2003年5月12日(月)

線路に転落 そこに電車が 義足男性 危機一髪 はずみで退避スペースへ 地下鉄・阿倍野駅

2004年5月7日(金)

小さなスペースにできるだけ多くの情報を盛り込む、漢語志向の見出しにはやはり四字熟語は好都合のようである。

(9) に関連

技術屋も経営のプロたれ 競争力出す専門大学院 一橋・慶応、キャノン・・・関心

2002年5月26日(日)

社会人来れ 技術経営伝授 北陸先端大学院大学 東京で修士課程を開講

2003年7月7日(月)

部分的にはあるが、古語を用いることによってある種の表現効果をねらっている。

また、その他、見出しではないが、写真付きで次のような小さなコラムがあった。

「こどもの日」を前に、兵庫県淡路町(淡路島)の国営明石海峡公園で、こいのぼりならぬ「タイのぼり」

「タコのぼり」が悠々と泳いでいる。

2004年4月30日(金)

中級以上の文型に出てきそうな「～ならぬ～」と言う表現が、大変具体的にわかりやすく描かれてるうえに、「鯉」でなく「タコ」「タイ」という意表をついたおもしろさが学生にも受けた。また、次のような例、

どうするアイフル・武富士 消費者金融に銀行触手 崩れる垣根

2004年6月11日(金)

この表現の持つ「味」がわかるためには、日頃からテレビの視聴も欠かせないということになるのだろうか。こういったことも言葉を形成している要因の一つである。今、この原稿を執筆しているぐらいのタイミングでなら、この見出しのおもしろさはわかるだろうが、おそらく数年立っただ後にこれを読者が見れば、何の変哲もない言語表現となっているに違いない。次の例も同様。「タマ」は決して猫のことではない。

タマちゃん 針取れてる! 7日ぶり1000人「ホッ」

2003年5月12日(月)

新聞に見える言語表現が如何に句のものであるか、また一連の背景を前提に書かれているものであるかを思い知らされる。今後、学習者が日本語のより高いレベルの理解・運用を目指すのであれば、単なる言葉の形式と意味を学ぶだけでは足りないものがあること、それを越えたさまざまな要因が言葉を形作っていることを学習者に知らしめることが、上級レベルを受け持つ語学教師の務めではないかと思われる。

4. おわりに

言葉をできるだけ限りなく、「形式」あるいは「型」として見る見方は、ある程度までは必要である。しかし、言葉は、文化・社会・歴史という世界で、大勢の生身の人間が日々絶えることなく作り出している以上、そういった「形式」にはならない「無形」の要素を抜きにしては考えられない。

「上級文法」で目指したことは、偏に、「辞書を引いてもわからない日本語」の世界、「ネイティブならわかる日本語」の世界を、可能な限り客観的に具体化しようとしたことである。もちろん、その一々を挙げることには限界があろうが、その一端は示せたのではないだろうか。語彙も豊富にあり、意志疎通にもある程度困らない上級レベルの日本語学習者にとって、今後さらにネイティブの日本語に近づくには「何について」知っていけばいいのか、学ぶ内容は無限大であるが、その分野に見当が付けられたということで、学習者は随分救われるのではないかと思う。

教師は言葉の教育の目的、重要性はよくわかっている。だが、教育のその内容とは一体どのようなものであるのかがなかなか規定できない。日本語教育のあるべき姿を求めて、日々、教授内容を検討し、試行するのであるが、私などは何度授業をやっても、毎回、後に必ず言いようのないある種の「限界」を覚えるのである。

しかし、それはおそらく教育内容の対象が「言葉」である以上、常に付いて回ることなのであろう。それを示したということで、結論と今後の課題にしておきたい。

(しょうじ いくこ 本センター助教授)